

アグモンのヒーロー生活

ボルメテウスさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見た目はマスコット、中身はおっさん、職業はヒーロー。

そんな個性が詰め込みすぎなヒーロー「アグモン」が誰もが何かしらの超常能力・個性を持つようになった世界で何を救える。

目次

ブリッツグレイモンは硬い	1
グレイモンは通さない	9
メタルグレイモンの追憶	15
無双のウォーグレイモン	25
幻のオメガモン	34
進撃！脅威のグレイモン	39
炎の対決！フレイドラモン！	49
共闘！ガイオウモン	61
タイマン！シャイングレイモン 前篇	67
タイマン！シャイングレイモン 後編	

ブリッツグレイモンは硬い

「くっ!!」

「ちっ、良いもんを喰らったな」

そう言いながら、太く赤い血管を鎧のように身に纏っている男はその腕を構えていた。

その男の名はマスクュラーはそう言いながら、目の前で戦っていたウォーターホースの2人に向けて、笑みを向けながら、その腕を肥大化していく。

「だけど、これで終わりだぜ!!」

その言葉と共にマスクュラーの一撃がウォーターホースに向けて放たれる。

「まったく、仕事が増えるな」

だが、拳が降り注がれる直前、甲高い音と共に赤い影がマスクュラーの前に立った。

「ああん!!」

その言葉と共にマスクュラーはウォーターホースに向けて放った一撃が防がれた事に気付く。

手に感じる痺れと共に、その攻撃を防いだのが赤い鉄の塊だと気づきながら、冷静に

なる為はその場から離れた。

そこに立っていたのは人型の赤い機械の装甲を身に纏っており、全身が武器となっている存在だった。

顔は恐竜を思わせる形となっており、鋭い目はマスクュラーを睨んでいる。

「なんだてめえは?」

「ああそう言えば、この姿は始めてだったな。」

まあ普段の活動では使わないけど、この場では仕方ないな」

そう言いながら、その存在は真つすぐとマスクュラーに向けて腕を構えた。

「マスクュラー。」

てめえをここで逮捕する。

まあ一応名乗るとしたらヒーロー、アグモンだ」

同時にマスクュラーに向けて、その鋭い目でアグモンは睨み付ける。

「つアグモンだつてえ!!」

それはつまり、それが噂に聞くてめえの本気の姿だという事なんだよなあ!!」

その言葉を聞くと、マスクュラーはその言葉と共に、先程とは比べものにならない程の筋繊維を姿を変えていく。

その姿はまさに化け物という言葉に相応しく、ウォーターホースの2人は瀕死だが、

身体の震えが止まらなくなった。

だが、そんな中でもアグモンの全身から聞こえてくる音に気づき、ウォーターホースはアグモンを見つめる。

「あつアグモンさんっ!?!」

「さんはいらぬい。」

あなた達の方が先輩だから。

それよりも、ここから人込みが少ない所は」

「えっと、確かここから先のエリアなら」

「了解」

その言葉を受け取ると同時にアグモンは一瞬、構える。

「サンダーバーニア」

その一言と共に一瞬キーンと鳴り響く音と共にアグモンの姿が一瞬消え、姿を変えていたマスキュラーと共にいなくなった。

「何がっ!!」

姿を消した2人の行方を探るようにウォーターホースは周りを見渡す。

同時に大きな揺れが起こり、その方向を見るとアグモンの姿はウォーターホースが指示した場所へとマスキュラーと共に移動していた。

「とにかく今は救援をっ」

そう言いながら、未だに壊れてない事を願いながら、ウォーターホースは懐にある連絡機を取り出す。

そんなウォーターホースとは別にアグモンは戦いに集中場所に移動すると、マスキュラーを睨み付ける。

「へえなんだよそれはっ!!」

結構がつしりとしているじゃないかよお!!」

地面へと埋まっていたマスキュラーは起き上がると同時に自分の拳にある痛みと共に目の前にいるアグモンを睨み付ける。

その身体に身に纏っている鎧は、先程までの最大の力でも破壊する事ができなかった。堅さもあり、笑みを浮かべていた。

先程と比べものにならない強敵との戦いにマスキュラーは興奮で笑みを浮かべていた。

「さっさと決めるぞ。」

てめえにかけている時間はない」

そんなマスキュラーとは対照的に銃と一体化したとも言える腕をマスキュラーに向けてながら、アグモンは冷静に告げる。

「そうつれない事を言うな!!」

マスキュラーは叫びながら、その身体は既にアグモンよりも遥かに巨大になった姿となり、その拳をアグモンに向けて放った。

拳がぶつかるのと同時に、アグモンを中心に地面は大きく割りながら、その威力を示すように地面へと埋もれていく。

だが

「終わりか」

「へえ」

アグモンの表情は変わらず、同時にアグモンは拳を構えた。

「今度はこっちの番だ」

その一言と共にマスキュラーの腹に向けて、アグモンの拳が埋まる。

「があっ!?!」

鉄の塊が当たる事によって、一瞬息を吐きながら、すぐにアグモンに向けて笑みを向ける。

「良いぜえ、アグモン!!」

その言葉と共に再び殴り返した。

鉄と筋肉がぶつかる音を響かせながら、その土地を大きく割りながら、アグモンとマ

スキュラーの拳がぶつかり合う。

アグモンの装甲には未だにへこみは見えず、対照的にマスキュラーの身体には徐々にだが血が出てくる。

「終わりだ」

「はっ?」

そう戦いの中でアグモンの言葉と共にマスキュラーの身体にさらに一撃を加えるように拳を叩きつける。

「プラズマステーク」

その言葉と同時にグレイモンの腕の銃口に似た穴から出た小さな電気がマスキュラーの全身を痺れさせる。

「がってめえ!!」

「これで終わりだ」

「ふざけつるなっ!!」

まだ、終わっていないだろっ!!」

そう言いながら、身体を起き上がらせようとするが、身体は微動だに動かない。「てめえの筋肉を動かせる電気信号を止めた。

とりあえずは牢屋まで大人しくしてろ」

「ちっ、負けたのかよ」

そう言いながら既に決着ついたのに納得したように言葉を出さなくなった。

やがて、救援に来たヒーロー達はその場を見ていた。

「えっ本当に、アグモンなんですか？」

「まあブリッツグレイモンの姿になるのは始めてだったな」

その言葉と共にアグモンの姿は徐々に変わっていき、そこには黄色い小型の恐竜へと変わる。

「ほっ本当にアグモンだった!？」

「まっという訳だ。」

それで、他の被害者は？」

「いいいません!!」

お疲れ様でした!!」

「えっ、もう良いの？」

救助とかは「とつとんでもないですつ!!アグモンさんのおかげで被害が防げましたから!!」そうなのか？」

俺は遅れて来ただけなんだけどなあ」

そう言いながら、他のヒーロー達から言われるままに、アグモンはそのまま離れてい

8 ブリッツグレイモンは硬い

く。

グレイモンは通さない

アグモンというヒーローはヒーローの中でも有名な人物である。

その小柄な恐竜の見た目や子供にも似た話し方もあってか、子供達を中心に人気になっており、警察などでもよくマスコットとしてイベントに参加させられる事が多い、

「みんなあ!!」

道路を通る時にはちゃんと横断歩道を見て渡ろうねえ!!」

「「はあああ!!」」

そう言いながら、アグモンは幼稚園児が着るスモッグを身に着けながら、周りに集まってきたいる子供達に交通ルールを教えていた。

そのままアグモンは子供達に囲まれながら、尻尾に捕まったり、肩車をしたりなど、多くの子供達と遊んでいた。

そんなイベントが終わり、アグモンは休憩室にて

「いや、本当においちちゃんはそういうの仕事が多すぎてきついんだよね」

そう言いながら、アグモンはコートから取り出したココアシュガレットを煙草のよう
に啜えながら呟く。

「いや、先輩、そういうのはもう少しなんとかできませんか。

というよりも、先輩の歳、俺と一つ違うだけですよ。」

そう言ってアグモンに対して言うのは、彼の後輩のヒーローの一人であるシンリンカムイは言う。

「そう言ってもね。」

「おいちゃんはいつも子供達の前では純粹無垢なキャラクターを演じないといけないんだよ。」

「なんだか、騙しているようで、罪悪感が凄いだよね。」

「そう言いながら、啞えたココアシユガレットをかみ砕き、口の中で燃やして器用に煙と作り出しながら呟く。」

「というよりも、お前もなんでこんな所に来たの？」

「悪いけど、おいちゃん、人に金を貸すのはあんまりしたくないけど。」

「その心配はしなくても大丈夫ですよ。」

「それよりも、先輩に聞きたいのですか、この周辺で活動している敵についてです」

「敵？」

「厄介なのか？」

「ええ、単純な能力ですが、巨大な蜥蜴になる個性です。」

ですが、パワーが厄介で「きやああ!!」っ!!」
「まさかつ!!」

表で聞こえてきた悲鳴に気が付き、アグモンとシンリンカムイは同時に走り出した。
そこには巨大な蜥蜴が車を吹き飛ばしながら走っていた。

「どけどけえ!!」

その叫び声と共に敵が吹き飛ばした建物の瓦礫が先程までイベントに参加していた子供達に向かっていった。

「つまずいっ!!」

その言葉と共にシンリンカムイはその手から個性を発動させ、防ごうとした。

だが

「アグモン進化!!」

隣から聞こえてきた声に驚き、同時にシンリンカムイは上から感じた熱風と共に瓦礫は完全に燃やされてしまう。

「先輩っ!!」

同時に敵の前に青い縞柄の入ったオレンジ色の皮膚、黒い兜を思わせる角に鋭い牙。

その姿から先程まで愛らしい姿のアグモンからは想像できない程の狂暴な姿へと変わったが、その姿を見た瞬間、その場にいたシンリンカムイも、子供達も周りにいた人々

も歓声へと変わった。

「グレイモン!!」

その言葉と同時に大きく飛躍したグレイモンはそのまま敵へとぶつかると同時に巨大な亀裂が出来上がる。

恐竜と大型の蜥蜴、その激突はまるで怪獣映画を思わせる場面であり、その場にいた全員がその光景に対して息を飲んで見守っていた。

「シンリンカムイ!!」

「了解!!」

その言葉と共にシンリンカムイはグレイモンからの指示を受けて、行動に移す。

「ちい邪魔だっ!!」

敵はそう言いながら、グレイモンの拘束から逃れようと必死に動く。

だが、グレイモンは足に力を籠め、尻尾で力強く止め、敵を一步も通さなかった。

「先輩、避難は完了しました」

「待っていたぜ、その一言をつ!!」

同時にグレイモンは大きく口を開いた。

その口の中には巨大な炎の塊が出来上がっており、それを見た敵は思わず悲鳴を上げるが

「メガフレイム!!」

グレイモンの叫び声と共に敵はグレイモンから吐き出された炎の塊が敵に激突する。
「がはあ!?!」

その攻撃を受けた敵はそのまま白目を向けながら、その場で気絶した。

「たくつ、余計な仕事を増やしやがって」

そう言いながら、グレイモンは気絶しているのを確認すると共にその場で座り込む。

「すつすげえ!!」

グレイモンだ!!」

「あつおつおお!!」

そうだぞ、俺はグレイモンだぞ」

「すげえ、尻尾なげえ!!」

「角硬いつ!!」

「あつ駄目だよ!!」

僕、身長高いから、危ないよ!!」

そう言いながら、先程まで敵に怯えていた子供達はすっかりグレイモンに興味を持って遊んでいた。

「さすがの先輩も、子供達には敵わないようだな」

そう言いながら、シンリンカムイは敵を拘束しながら、その様子を眺めていた。

メタルグレイモンの追憶

「君達は本当に素晴らしいねえ」

どこかの荒野、そこには二つの存在が立っていた。

一つはスーツを身に纏い、背丈は人と変わらない姿だった。

もう一つは姿こそは人間だが白い騎士の姿に片手には恐竜を思わせる剣、もう片方は狼の砲台が各々一体化している存在だった。

その余りにも違う存在だが、白い騎士はボロボロになりながら、スーツの男に向けて睨んでいた。

「君達は僕がこれまで見てきたどの個性にもない特徴を持っている。

無数の姿を持つその個性、何よりも全く別の存在が一体化するなんて、聞いた事がない。

良かったら、僕の仲間にならないか？」

「断る!!」

男は親しみを込めたように手を指し伸ばすが、白い騎士から二つの声が響きながら、そのまま剣で振り払い、男に向けて、砲台を男に向ける。

「残念だよ」

そう言つて、男を中心に巨大な力を発動させた。

あまりにも強すぎる圧迫感が白い騎士に襲い掛かるが、それでも白い騎士は倒れない。

「行くぜ、相棒！」

「勿論だ!!」

白い騎士から鳴り響く二つの声は互いに支えるように叫びながら、目の前にいる男に向かつていく。

「……夢か」

だが、白い騎士の戦いが始まる直前、居眠りをしていたアグモンは起き上がった。

アグモンが普段から活動している事務所は小さな事務所であり、有名なヒーローが働いているとは思えない程に小さかった。

それでも、体格の小さなアグモンにとっては十分な程の大きさであり、仕事の依頼から報告書、客の対応室など、事務所として最低限の機能は揃っていた。

「さて、仕事に行くか」

そう言いながら、あくびをしながら、移動用のコートを身に纏いながら、アグモンは事務所の入り口に立つ。

「行ってくるぜ」

そう言ったアグモンの目の前にあつたのは今よりも若い頃のアグモンと狼の毛皮を身に纏ったアグモンと同じぐらいの体格の存在が事務所の前で記念写真を撮っていた姿だった。

アグモンはゆつくりと目的地まで歩きながら、時折見かける子供達やファンの子との交流を行っている

「あら、先輩」

そう声をかけたのは、チャイナ服を思わせるヒーロースーツを身に纏い、爪の髪飾りをしている女性だった。

アグモンと比べても高い身長を持つ彼女はアグモンを見かけ驚いている間に

「んっあぁリユーキュウだぁ!!」

久しぶりい!!」

パトロールの途中だったのか、知り合いであるヒーローのリユーキュウに手を振る。

「あつあぁ、そう言えば、そういう事ですね」

「何が?」

その言動に違和感を持って、笑みを浮かべていたが、気付かないふりをしているアグモンはわざとらしく首を傾げる。

「いついえ、それよりも先輩はどこに？」

「これから子供達と一緒にパンを作りに行くんだあ。

楽しみだなあ」

そう言いながら、アグモンは笑みを浮かべているが、目を閉じている為分かりにくい
が、知り合いの前でキャラを演じているアグモンの目は死んでいた。

「そつそつですか」

そう言いながら、リユーキュウは少し目を離してしまふ。

だが、ふとリユーキュウの目に映ったのは空を飛ぶ何かだった。

その何かはゆつくりと近くの建物に近づくと、同時に身体が膨れ

「きゃあああ!!」

「っ!!」

爆発した。

建物が爆発した事によって、周りの市民は悲鳴を上げ、ビルは倒れ始めた。

「リユーキュウ！」

「はいっ!!」

1秒にも満たない程に素早く、彼らは建物に向かって走り始め、その姿を変えた。

「アグモン進化！グレイモン！」

「はあ!!」

アグモンは瞬時にグレイモンへと姿を変え、リューキュウも先程まで人だった姿から龍へと姿を変え、倒れてくるビルを支えた。

ビルの大きさは巨体を誇る二人が支えるのがやつとな程の大きさであった。

「ぐっ、これを支える時間はそれ程長く保てないっ!!」

「ああ、けど俺達が支えないと、被害が大きくなるっ!!」

そう言いながら二人は巨大なビルを支えながら、周りに次々と集まってくる消防士にヒーロー達が来るのを見る。

「けどっこのままじゃっ」

「リューキュウ、お前は避難を手伝えっ！」

その間は持たせてやるっ」

「でもっ先輩一人でこれを支えるのはっ」

「なあに、プルスウルトラっ！」

限界のその先だけ。

それに俺はまだまだ本気じゃないからなあ!!」

その言葉と共にグレイモンは大きく叫ぶ。

「グレイモン超進化!!」

その言葉と共に、ビルを支えていたグレイモンの身体は光り始め、大きく変化していた。

その姿は先程までのグレイモンと比べて、身体の半分以上が機械へと変わっており、特に左腕は巨大な機械の腕が特徴的な姿、メタルグレイモンへと姿を変えた。

「メタルグレイモン!!」

共にビルを支えていたリューキウウも、その姿に驚きを隠せなかったが、目を合わせた瞬間に頷き、その場を離れた。

同時に支えを無くしたビルは倒れていくが、メタルグレイモンは左腕を構える。

「トライデントアーム!」

メタルグレイモンの叫び声と共に、左腕から伸びた爪はビルへと突き刺さる。

その勢いは先程まで崩れ落ちそうだったビルを瞬く間に支える程の力を持っていた。

「今の内に避難をっ」

メタルグレイモンが支えているのを確認すると、リューキウウを始めとした多くのヒーローや消防士達はその場にいた市民の避難を始めた。

ビルの中でも崩壊している部分や破壊が必要な部分も、ビルを支える必要のなくなったりリューキウウの力によって次々と救出が行われていく。

その時間は僅か10分という短時間だったが、その間もメタルグレイモンは巨大なビ

ルを一人で支えていた。

「避難、完了しました」

「待ってたぜ、その一言っ!!」

その言葉と共にメタルグレイモンの胸元が開くと

「ギガデストロイヤー!」

その言葉と共に胸元のハッチから現れたミサイル、ギガデストロイヤーが発射された。

ギガデストロイヤーはそのまま倒れそうになっているビルへと当たると同時に、その破壊力によって、瞬間にビルを焼き尽くした。

その威力は強く、爆発による熱風が周りに襲い掛かるがリューキュウ達はその身体を使つて、熱風から市民を守る。

そして熱風が収まったのを見計らつて、見てみると、そこには先程まで倒れそうになっていたビルは跡形もなく消えていた。

「本当にこれはあんまり使いたくなかつたけどな」

そう言つたメタルグレイモンの言葉に同意するようにリューキュウも見つめる。

ビルの崩壊事件から数時間後、やっと後処理も終え、アグモンはコートを着ながら、自宅へと戻つていた。

「やっぱり、完全体になると、筋肉痛になっちまう。

なるべく成熟期で済ませたいのになあ」

そう言いながらアグモンは先程までの事件後から続いている筋肉痛に悩みながら、歩いていく。

「あら、お疲れ様ですアグモン先輩」

「今はプライベートだからヒーローの名前を言わなくても良いぞ」

「そうですか？」

では八神先輩、お疲れ様です」

そう言ったリユーキウこと、龍間の姿は仕事を行っていた時のヒーローの姿とは別に身元がバレない程度の変装を行っていた。

「そう言えば、八神先輩は今夜は予定はありますか？」

「んっ？」

特にはないけど？」

「でしたら、久しぶりに一緒にどうですか？」

私も久しぶりにあの店のハンバーガー食べたくなったので」

「別に良いぜ？」

そう言いながら、八神はこれから向かうハンバーガーに思いを寄せながら、歩き始め

る。

「それにしても本当に立派になったな。」

まさかあんなにじゃじゃ馬だったお前が今では立派になって」

「インターンの頃の話は辞めてください。」

私も若かったのですから」

そう言いながら頬を赤くしながら、龍間は答えた。

「それにしても、本当に懐かしかった。」

メタルグレイモンですか」

「そう言えば、インターンの時の事件もメタルグレイモンになっていたな」

そう言いながら、彼らはインターンの頃に起きた事件を振り返りながら、笑みを浮かべる。

「その、やはりまだ引きずっているんですか」

「まあな。」

それに、あいつが戻ってくる場所を守らないといけないから」

そう言いながら八神は呟く。

「サイドキックはやはり」

「ああどうもなあ？」

事務処理とかは一人でなんとかできるけど、どうも仕事は一人かあいつとのサイドキックじゃないと身が入らないというか」

そう言いながら、八神はコートから取り出したココアシユガレットを啜えながら呟く。

そんな哀愁漂う姿に龍間はただ一緒に歩く事しかできなかつた。

「先輩あの「おつついたぜ」っ」

そう話しかけようとしたが、目的の場所へと辿り着いたのか八神は話を無意識に遮ってしまふ。

「どうしたんだ？」

「・・・いえ、なんでもありません」

そう言いながら、龍間は笑みを浮かべるしかなかった。

無双のウォーグレイモン

その日、アグモンは児童養護施設に向かっていた。

仕事の内容は簡単に言うとう子供達と一緒に遊ぶ事だった。

親がいなくなっただばかりの子供達は心の傷が深く、彼らを励ます事もアグモンの仕事の一つである。

「そのはずだったのに」

そう言いながら、目の前に立ちはだかる敵に向けて睨みつける。

この施設に入ると、目の前にいるのは子供達や職員だけではなく、銃を構えた黒服の男達だった。

「おっと、大人しく着いてこいよ、アグモンさんよ」

「ぐっ！」

その言葉に従うしかなかったアグモンはゆっくりと動き出す。

人質の子供を一人捕らえている敵と、それを囲むように3人の敵とボスだと思われる一人の敵。

計5人の敵がアグモンと人質を連れながら、ゆっくりと施設の上の階へと目指してい

きながら、上の階へと行く度にアグモンは同時に悟る。

（こいつら、俺を戦わせないようにしている）

施設に入った瞬間にロックがかかり、職員と子供達だけでは脱出は不可能な密室になっっていた。

そしてアグモンが例え人質を助けた後にグレイモンに進化すれば、その大ききで一瞬で建物は崩れてしまう。

（逆転の手は残されている。

だけど、その為にも今は時間を稼ぐしかない）

そう言いながらアグモンは目の前にいる敵に向かって睨む。

「お前達の目的は僕なのか」

「その通りだ。」

俺達はある目的の為にあんたを殺しに来た」

そう言いながら、敵のボスだと思われる人物はアグモンに向けて銃を向けた。

「それでこの建物か？」

「ああ、お前が戦う時には巨大な姿にならないといけない。」

この建物の中ではそんな事はできないだろ」

そう言いながら、敵のボスは笑みを浮かべながら見つめる。

「なぜ、僕を殺すというんだ？」

「ある方からの命令だね。」

お前と相棒が再び手を組まれたら厄介だから、その前に始末しろと言われた」

「っ!？」

その言葉を聞き、アグモンは大きく目を見開いた。

「まさかっ!!」

「どうやら、察したみたいだな？」

これで晴れて、俺もあの方に認められる訳だ」

「テロリストが認められるとはな。」

ウォルフラムだったか、お前は」

「ほう、ヒーローに知られているとは光栄だな。」

まあ、死ぬのは変わりないけどな」

そう言い、銃の引き金を引こうとした時だった。

「っボス大変です!!」

捕らえられていた人質が逃げ出しましたっ!!」

「なにっ!!」

その一言にウォルフラムはすぐに窓の外を見る。

そこには人質と共にヒーローだと思われる集団が避難していた。

「僕ばかりに気を取られていたようだね。」

悪いけど、時間稼ぎをさせてもらったよ」

そう言い、アグモンはウォルフラムに向けて言う。

「はっだからどうしたっ!!」

人質がいらないだろうと、この建物内でお前は個性は発揮できない」

「さあ？」

それはどうだろうね？

それに僕は今、これまでにない程に怒っているから」

アグモンはそう言い、鋭い目でウォルフラムを睨みつける。

「っ!!」

瞬間、ウォルフラムは身に感じた寒気と共に、周りにある鉄柱を操り、アグモンへと攻撃した。

「アグモン！ワープ進化!!」

その一言と共に、アグモンに襲いかかる全ての鉄柱が切り裂かれ、同時に現れたのはアグモンと同じ黄色の鎧を身に纏った、龍だった。

「ウォーグレイモン」

大きさはアグモンに比べれば大きく、人と同じ大きさで、グレイモンやメタルグレイモンを知る者達からしたら、驚きしかなかった。

だが、その存在と対面しているヴィラン達はその存在を見た瞬間から、冷や汗が止まらなかった。

「なっなんだ。」

お前つとにかく人質をつ」

ウォーグレイモンの出現はその場にいた全員が驚きを隠せずにはいたが、そんな彼らの驚いた瞬間を狙うようにウォーグレイモンの姿は消える。

「なっどこにつ!!」

ウォルフラムはすぐに周りを見渡していると、彼の横に何かが通り過ぎた。

その正体を確かめる為に見ると、そこに倒れていたのは、人質を取っていたはずの部下だった。

そしてその人質は今、ウォーグレイモンが窓を突き破り、一瞬で他のヒーローに任せていた。

「頼めるか」

「っ分かりました」

ウォーグレイモンからの言葉にヒーローが頷くと同時にまた一瞬で動く。

「っ!!」

その事実を知ると共に、振り返るとウォーグレイモンは既にこちらに向かっていた。「ちっヒーロー一人で戸惑うかよ!!」

同時に先程突き破った場所に入ったウォーグレイモンに対してそう言い残りの部下が襲い掛かる。

巨大化し暴走させた紫色の拳と腕を刃物に変える個性を持つ二人の敵がウォーグレイモンに向かって襲い掛かる。

だが、ウォーグレイモンは腕に装着されている爪を使い、その刃物の軌道を逸らし、同時に爪が外れた事によって現れた手で紫色の敵の拳を受け止める。

「なっ!!」

「.....」

そのまま、流れるような動きで二人の敵を蹴り払い、壁に叩きこむ。

「なっなんなんだよっ!!」

リーダー、どうなっているんだよ!!

アグモンの奴は、この建物だったら勝てるはずじゃなかったのかっ!!」

「そんなの俺だって知るかっ!!」

目の前で起きている事に未だに追いつかないウォルフラムと最後の部下はそのまま

目の前にいるウォーグレイモンを見つめる。

「悪いが、さっさと終わらせてもらおう」

「ちつこのまま終わらせてたまるかよっ!!」

そう言い、最後の敵はそのまま水かきのある手が巨大化させ、突風をウォーグレイモンへと向ける。

だが、ウォーグレイモンはそれを読んだように、その手の中に小さな火塊を作り出し、投げる。

「ガイアフォース!!」

その言葉と共に放たれた一撃は突風を振り払い、壁へと叩きつける。

「ちつ」(まさか、こんな切り札を隠していたとはなっ!仕方ない、ここは撤退するしかない)

「逃がすと思っっているのか?」

「逃げるさ。」

「あんたがヒーローならば、なおさらな!!」

その言葉と共にウォルフラムは手元のスイッチを押す。

同時に地面を大きく揺れる程の爆発が、起こり、グレイモンはすぐに音がした方向を見た。

窓から見えた物、それは建物の上が爆発し、その建設物が避難している人々へと降り注ごうとしていた。

「どうする、ヒーロー」

「っ!!」

目の前にいる敵を放っておけないと考えるウォーグレイモンだが、それよりも人命を第一に考えた瞬間、建物の壁をぶち破り、その手を構える。

同時のその手には先程と同じように炎の塊が集まりだが、ウォーグレイモンが上に掲げた瞬間、その大きさはウォーグレイモンを遥かに超える巨大な物へと変わる。

「ガイアフォース！」

同時に投げたガイアフォースは市民に迫っていた全ての瓦礫を飲み込みながら、消滅する。

「皆っ、大丈夫かつ!!」

「アグモン」

ウォーグレイモンはすぐに避難していた人々の元へと向かい、周りを見渡す。

怪我人などはおらず、皆、ウォーグレイモンの姿に驚きでそれ所ではなかった。

「っ」

安全を確認したウォーグレイモンはすぐに敵がいた方向を見つめが、既に敵の姿はな

かった。

「逃げられたか」

そう言いながら、ウォーグレイモンはその手を強くに握りしめるが、そんな彼に対して、子供は手を握った。

「アグモン、助けてくれてありがとう!!」

そう笑みを浮かべた子供の姿を見て、ウォーグレイモンは

「うんっ、皆が無事で良かったよ」

そう言いながら、ウォーグレイモンは光に包まれると共に、アグモンへと姿が戻る。

そうして、避難していた子供達の相手をしながらも、警察、ヒーローと連携して、敵のその後の情報を探った。

だが、まるで突然姿を消したように、その後の追跡はできずにその日の捜査は終わった。

しかし、アグモンにとって、その結果自体に何か確信を持ったように、とある場所に向かった。

幻のオメガモン

謎のテロリストの襲撃されたその日の夜。

アグモンはとある場所に向かっていた。

そこは落書きが多く書かれており、不法投棄がされている市営多古海浜公園という場所だった。

普段から不法投棄もされており、誰も立ち寄らない場所で破棄されているソファに座っている一つの人影に向かっていく。

「八神君」

ふと、近づくアグモンに気付いたその影はアグモンの本名である八神の名を呼んだ。

「オールマイト、お疲れ様」

そう言いながら、アグモンは手に持ったコーヒートをオールマイトに渡した。

オールマイト、それはこの世界において最も有名で最強のヒーロー。

だが、その姿は世間では知られておらず、ごく一部の者しか知らない姿だった。

「身体の調子は？」

「未だに悪化は続いている。」

それでも、少しは希望が持てたよ」

「そう言いながら、疲れた様子を見せながらも確かな希望を持てたように見つめていた。」

「それだったら、良かった。」

「その後継者って一体どんな子なの？」

「無個性の子だった。」

「だけど、その中にある可能性に私は賭けてみたくなった。」

「あの時になって、君の戦う理由も少しは分かったような気がする」

「そう言いながら、笑みを浮かべながらオールマイトは未だにゴミが残る公園を見つめる。」

「人間には無限大の可能性がある。」

「私は人々の希望になる為に戦ってきたが、君の言う人々の可能性について、少し分かっていかなかった所があったと思う」

「そうかな？」

「ああ、私は平和の象徴というのに拘っていた。」

「そう言う意味では、他のヒーロー達を信頼していなかったかもしれない。」

「だけど」

そう言いながら、オールマイトは思い出すように

「君と君の相棒が見せた可能性のように、私はあの子を信じようと思う」

「そっか、でもオールマイト。」

もしかしたら、そんなに時間がないかもしれない」

「それはどういう事だい」

先程までの明るい話題とは変わるようにアグモンの目つきは変わっていた。

「あいつが、未だに生きている可能性が出てきた」

「っそれは本当か!!」

その言葉に驚きを隠せないオールマイトはトゥルーフォームからマッスルフォームへと一瞬で変わる。

「今日、起きた事件で相手した敵が言っていた。

俺と相棒が手を組んだら厄介だと。

あの姿になれたのは、あの一度つきり、そしてそれを知っているのは俺と相棒、オールマイト、そして」

「オール・フォー・ワン!!」

その一言と共に手に持っていたコーヒートを握り潰す。

「奴はあの時の戦いで深手を負っているから動けないと思う。」

けど、今回の敵のように裏で動いている可能性がある」

「まさかつ、だとしたらっ」

「焦らなくても良い」

そう言い、アグモンは言う。

「奴がこれまで行動しなかったのには、計画を立てているからだと思う。

それで動かないならば、その間に育てれば良い。

あなたが信じた子だ、きつと、それを超える可能性を秘めているから」

「・・・その通りだね、八神君。

君の言う通りだ、私が彼を信じなければどうするだ」

そう言い、トゥルーフォームが解除され、落ち着きを取り戻す。

「それに、どんなに無茶だろうと。

俺が作ってみせる」

その言葉に頷きながらオールマイトもまた、立ち上がる。

「分かった。

君と、そして君の相棒が繋いだ奇跡のように」

その言葉と共にアグモンは再び歩き始め、同時に朝日が昇りながら、その姿は映し出されていた。

そこにはかつての戦いで見せたオールマイトの姿と、そしてオールマイトが奇跡だと
言った姿、オメガモンとしての姿が一瞬だけ移される。

進撃！脅威のグレイモン

「えっと、姉さん。」

「なんで、俺の家にいるんですか」

その日、アグモンは久しぶりに自宅に帰つてくると、そこには死んだ目をしている猫のような存在がビールを片手に飲んでいた。

「夫が浮気した。」

「あいつ、どっかのキャバクラで遊んでいたのよお!!」

「そう言いながら、煽るように飲んでいる人物はそのまま自身に起きた事について話し出す。」

「それで、もしかしてだけど」

「離婚よ離婚!!」

「もうあいつの顔なんて見たくないの!!」

「という事で、幸一、しばらく居候させて」

「ええ」

「何、文句ある?」

「ありません」

既に座った目で、こちらに対して身に着けているグローブをこちらに突き出しており、それに対してアグモンは逆らう事ができずに了承する。

彼女の名前は八神輝、アグモンこと本名八神幸一の義理の姉であり、似た個性を持った姉弟である。

「それにしても、あんたのヒーロー人気凄いわね。」

なに、あの交通ルール指導」

「子供達の安全の為だよ。」

というよりも、姉さんこそ、保育園の先生なのに良いのかよ」

「あら、私こう見えて、子供達に人気なのよ」

そう言いながら、猫を被ったように演技をする姉に対して呆れたようにアグモンはため息を吐く。

「それに、私とあんたは本当に数少ない共通の個性を持っているのだから」

「まあそうだけど」

そう言いながら、アグモンはそのまま残っていた料理を口の中へとぱくぱくつと食べていく。

「それで、あんたはヒーローを何時まで続けるつもり?」

「しばらくは辞める気はないよ」

「まったく、あんたは生まれた時からそうだったわね」

「そう言いながら、輝は呆れたように言う。

「無理するんじゃないわよ」

「分かっている」

「そう言いながら、その日からアグモンと姉である輝との奇妙な生活が始まった。

「まったく、アグモンしつかりしなさい」

「いや、お姉ちゃん、なんでついて来てるの」

その日も仕事を行っているアグモンについてくるように輝も同行していた。

キャラを崩さないように苦笑いをしながら言う。

「あんたの仕事を見学したの。」

「まあ暇つぶしになつたし、後で家にね」

「・・・」

「そう言いながら、満足したように輝はその場で去っていった。

「はあ」

「思わず疲れてしまったアグモンはため息を尽きながら歩く。

「とにかく、事件はないと良いけど」

そう言いながら、とぼとぼと歩きながら町をパトロールを行う。

パトロールを行って、数時間、何やら大きな騒ぎが聞こえ、見てみると、車が吹き飛ばされていた。

その事から敵が暴れていると推測したアグモンはすぐに走り出す。

「アグモン進化!!」

その言葉と共に、アグモンの姿は変わっていく。

姿はグレイモンによく似ていたが、身体の大きさはグレイモンに比べれば細いが、その分筋肉質になっており、身体の様々な部分が尖って攻撃的なイメージを持たせる。

敵とぶつかると同時に、完全に敵を持ち上げ、咆哮する。

「ジオグレイモン!!」

そうジオグレイモンを宣言すると共に、目の前にいる敵の特徴を見つめる。

脳だと思われる部分は剥き出しになっており、グレイモンを思わせる牙と身体をしているが、その身体は黒く染まっている。

「俺と同じ?」

そう疑問に思っている間にも、目の前にいる敵はジオグレイモンに考える時間を与えないように、次々と火球を口から吐き出す。

ジオグレイモンはそれに対して、真つすぐと突っ込みながら、全ての攻撃を受け止め

ながら、腹部に向けて角で吹き飛ばす。

「はあ!!」

同時に空中に吹き飛ばされた敵に向けて尻尾を振り下ろし、地面に叩きこむ。

大きなダメージを与えたはずの敵だが、まるで痛みを感じないようにジオグレイモンの尻尾を噛みつく。

「ぐう!!」

尻尾から感じる鋭い痛みに一瞬だけ悲鳴を出しそうになるが、瞬時に口の中に貯め込んだ炎を敵に向ける。

「メガフレイム!」

その咆哮と共に敵に向けて炎が襲い掛かる。

だが、次の瞬間、敵の身体は一瞬で光り輝くと共に、その姿は変わった。

「なっ!!」

そこに現れたのは青い身体により大型になった機械の腕、未だに目立つ脳以外はメタルグレイモンと瓜二つの姿へと変わっていた。

「こいつ、まさか進化をつ!!」

そう言っている間にメタルグレイモンはその爪でジオグレイモンを吹き飛ばす。

「がはあ!!」

圧倒的な力の差で吹き飛ばされたジオグレイモンはそのまま建物にぶつかり、自身を起こすが、その隙を見逃さないようにメタルグレイモンは襲い掛かる。

「ぐぐるるるう!!」

襲い掛かるメタルグレイモンは持っている力をそのまま発散するように襲い掛かり、ジオグレイモンはその動きを先読みをしながら、なんとか攻撃を避ける。

だが、先程の攻撃が原因で疲労が見え始める。

「ぐっ」

決して油断できない状況の中で

「まったく、何をしているの!!」

同時に聞こえてきた姉の声にジオグレイモンは見つめると

「猫パンチ!」

突然現れた姉のその一撃がメタルグレイモンを吹き飛ばす。

「姉さん、なんでここに」

「晩飯の買い出しよ。」

たくっ、さっさと終わらせて、カレー食べるわよ」

そう言いながら、姉の背中に背負っている買い物バックを見せながら、ジオグレイモンに語り掛ける。

「・・・ああ」

帰りを待つてくれる人がいる。

それを聞くと、これまで守る為に出ていた力以上に、姉の為にも負ける訳にはいかな
い。

「うおおお!!」

同時にジオグレイモンの身体は光始め、その姿はさらに変わる。

そこに現れたのは、メタルグレイモンの特徴的な機械の腕は巨大な銃へと変わり、蝶
を思わせる羽は巨大な機械の翼へと変わる。

そして、その身に纏っている鎧は赤く光り輝いており、鋭い目は真つすぐとメタルグ
レイモンを睨みつける。

「ライズグレイモン!」

同時にライズグレイモンはその腕に装着されている銃を構えると共にメタルグレイ
モンと激突する。

「ぐっ!!」

力任せな攻めを構わず続けるメタルグレイモンだが、ライズグレイモンは後ろに下が
りながら、その羽は光り輝く。

「ライジングデストロイヤー!」

同時に放たれる光のミサイルがメタルグレイモンに向かって襲い掛かる。

背中から迫りくるライジングゲストロイヤーに気付いたメタルグレイモンはすぐにライズグレイモンを蹴り上げ、その手に装着されている腕で次々と撃ち落としていく。

「っ!!」

同時に胸のハッチが開くと共に、そこからギガゲストロイヤーが放たれ、それに対して、ライズグレイモンはその腕を構える。

「トライデントリボルバー」

その言葉と共に放たれた3つの弾丸はギガゲストロイヤーを二つ撃ち落とすし、メタルグレイモンに当たり、地面へと叩きつける。

「があ」

その威力によって、完全に力尽きたのか、メタルグレイモンの身体は光り、そこに現れたのはアグモンと似た黒いアグモンだった。

未だに脳ははみ出た状態だが、紛れもなくアグモンだった。

「僕とそっくりの」

同時にライズグレイモンはアグモンへと戻り、もう一体のアグモンへと近づく。

「おっと、ここに彼を連れていかれては困りますね」

「なっ!!」

同時にもう一体のアグモンの前に現れたのは黒い霧だった。

光り輝く目がなんとか人だと認識できるが、それ以外は未だに謎に包まれている。

「お前は一体」

「そうですね、あえて名乗るならば黒霧。

そして、ここにいるのはコマンドドラモン。

あなたをいずれ倒す存在です。

それでは」

「待てっ！」

その言葉と共に消える黒霧を追おうとしたが、一瞬で姿が消えてしまう。

「くそっ」

「落ち着きな、とりあえず避難誘導するわよ」

「ああ」

姉からの言葉に落ち着きを取り戻したアグモンは大きく息を吸いながら、すぐに誘導しようとしたら

「テイルモンだ!!」

「??」

突然聞こえた声に疑問に思うと、女の子が姉を向けて、聞き覚えのない名前で言う。

「ああ、言ってなかったわね。

私、サイドキックをやっていたから、あんたの所の事務所で今日から働く事になったから」

「はあああ!!!」

そう、姉からの突然の一言にアグモンは叫んでしまう。

炎の対決！フレイドラモン！

「お久しぶりです叔父様!!」

「ええ」

アグモンこと、八神幸一はその日の仕事を終えて、帰つてくると、なぜかピンク色の髪の少女が玄関で待ちかまえていた。

何が起きているのか分からずにいるのは隣にいる輝も同じだが、そんな彼女に電話がかかってくる。

「ちよつと待っててね。」

もしもし、えっ叔母様?!

明ちゃんが、えつとまあ、分かりました」

何やら気まずい話をしているが、明はキラキラとした目でこちらを見ており、輝を見つめていた為、そのまま電源を切る。

「明ちゃん。」

あなた、家出してきたの」

「はい!!」

「元気が良いなあ」

そう、元気の良い声で宣言した事に対して呆れるようにため息を出しながら「とりあえず、家に入ろうか。」

事情は聞くから」

「ありがとうございますごさいます叔父様!叔母様!!」

そう言いながら、遠慮無く、ドアを開いて、家の中へと入っていった。

「それで、えつと、なんで家出を?」

「実は私、雄英に入学しようと考えております」

「えっ!」

その言葉に思わず幸一と輝の2人はお互いに見合わせる。

発目明は2人の親戚の子であり、その個性も勿論把握している。

だが、その個性はズームと呼ばれる個性であり、遠くを見たり近くの物の分析などでは役に立つ個性だが、ヒーロー向きかと聞くと違う。

仮にズームをヒーローに使うとしても、強靱な身体での格闘又は遠くの的を射抜く射撃の技術が必要だが、彼女にはそれがとても感じられない。

「明ちゃん。」

その、私が言うのもなんだけど、ヒーローには「えっ私ヒーローになるつもりはあり

「ません」えっ?」

「雄英は私が知っている中でもサポートアイテムの開発が行いやすい学園です!」

「だからこそ、私はその学園に入り、様々な技術を習得したいと考えております」

「ああ、サポートアイテムか。」

「あれ、それは叔母さん達には?」

「雄英に入りたいと言ったら駄目だと言われました」

（ああ、ヒーロー希望と間違えられたパターンか）

「そう思うと少し納得したように頷く。」

「それで、既に雄英に提出する為のサポートアイテムも完成しておりますので、叔父様、ぜひ試着してください」

「ええ、良いよ。」

「俺は進化でだいたい邪魔になるし、メタルグレイモンやライズグレイモンになれば、自分の身体でなんとかできるから」

「大丈夫です!!」

「それを考慮したアイテムです!!」

「その言葉と共に、発目を取り出したのは赤い刃がついた卵だった。」

「これは」

「これは私が考えたベイビー、その名もデジメンタル!」

伸縮自在の素材でできており、頭から被る事により、スーツへと早く変わります。

これで、叔父様の姿が変わったとしても、スーツは対応します!!」

「いや、だから」

「叔父様でもやはり私のベイビーを使ってくれないんですね」

そう言い、明らかに落ち込んだ明の姿を見て

「はあ、分かったよ」

「ではさっそくやりましょう」

「この子、将来大物になるわね」

泣き落としからすぐに切り替わるその動作を見た輝は思わず呟いてします。

幸一はそのままデジメンタルを頭から被ってみると、赤いマスクに刃のような角が生えただけになっていた。

「どうですか」

「いや、少し蒸し暑い程度で性能もなにも」

「では、さっそく実践を「辞めなさい」ぎゃふ」

明が何かを行おうとした瞬間、輝は素早く彼女の頭を叩き、止めさせる。

「何をしますか叔母様」

「一応はこいつもプロヒーローよ。」

怪我でもしたら、あなたの入学自体はなくなるわ」

「そうだ、んっ?」

そんな会話をしていると、ふと焦げ臭い匂いがした。

何もしていないはずなのに焦げている匂いに幸一はすぐに周りを見渡すが、匂いは家ではなくドアの方からだった。

すぐに幸一は外へと飛び出すと、それ程遠くないから匂いと煙が出ていた。

「姉さん、明を頼む」

「えっ、幸一」

何が起きているのか分からず、すぐに止めようとしたが、幸一はすぐに飛び出した。

ヒーローとしてアグモンとして活動している幸一の身体能力は高く、煙の元へとたどり着くのにそれ程時間はかからなかった。

「そこで何をしている」

「んっ」

その声と共に煙を出した張本人だと思われる人物はアグモンの方を向く。

黒いフードを身に纏っており、顔は分からないが僅かに見える皮膚は焼け焦げたように変色した全身に、皮膚移植をしたような姿だった。

「ヒーローか。」

「こんなに早いとはな、しかもその姿、どっかで見た事あるな」

「一応アグモンだ。」

「このマスクは気にするな」

「アグモンへえ。」

「アグモンか、だったら丁度良い」

「そう言い、敵はそのままアグモンに向けて手を構え、そこから青い炎を噴射した。」

「ベビーフレイム」

「同時にアグモンもまたベビーフレイムを出し、その炎を相殺する。」

「茶毘、お前を焼き殺す敵だ」

「だったら、お前を逮捕する!!」

「その言葉と共にアグモンは構える。」

「現場になっている場所はビルの間で無理な進化は周りに大きな被害が出てしまう。」

「だからと言って、目の前にいる敵はアグモンの奥の手となる姿になるまで時間をくれる可能性は低い。」

「何よりも、茶毘の背後で燃え続ける何かのせいで火災の危険性が高い。」

「よって、アグモンはこの姿のまま倒さなければならぬ。」

「どうした、ヒーロー！」

その言葉と共に再び青い炎は出すが、アグモンはすぐにベビーフレームを放ち、相殺させながら、接近する。

人よりも小柄な身体のアグモンだが、普段のヒーロー活動での戦闘も多く、戦闘を得意としない姿でもある程度の戦闘は行える。

鋭い爪での怪我を当てないように拳での攻撃を行いながら、敵の視界に捕らわれない戦い方を心がける。

「ちっ、恐竜にならなくても、そんだけ強いのかよ!!」

そう言いながら、茶毘は周りに炎をまき散らす。

近接での戦闘がアグモンよりも劣る茶毘だが、彼は被害を少なくしようとするアグモンとは違い、周りの被害など関係なく戦える。

それもあって、アグモンを追い詰めるのにはそれ程苦労しなかった。

「ぐうー！」

戦いが長くなればなるほど被害が大きくなる。

焦りそうな思考を纏めようとするアグモンだが、ふと身体に違和感を感じた。

「熱くない」

それが大きな疑問だった。

アグモンは炎を使うヒーローだが、炎に絶対的な耐性はない。

内側から作り出すベビーフレイムなどの技も放つのに失敗すれば火傷もするし、炎の攻撃を受ければそこから火傷もする。

だが、先程からわずかに当たった場所も、そのような火傷が見られない。

「もしかして、このサポートアイテムのおかげ？」

「だけど、もしかして」

アグモンはそう言いながら身体の変化に対して疑問を思う前に

「これで終わりだ」

目の前に迫りくる茶毘に対抗する為の賭けを行う事にした。

「アグモン、進化ー」

「なに」

突然の出来事に対して少年は驚きを隠せなかった。

目の前で確かに燃やされていたはずのアグモンは、青い炎から赤い炎へと変わり、体格は一回り大きくなる。

同時に炎の中から現れたのは炎を思わせるグローブとマスクを身に纏い、黄色い身体を持つ、龍人へと変わっていた。

「燃え上がる勇氣、フレイドラモン」

フレイドラモン、これまでのアグモンが行ってきた進化の中でオメガモン以外で初めてグレイモンの名前がつかない身体。

身体に違和感を感じながらも、それでも先程よりも全身に力が溢れ出していた。

一方、その姿を見た瞬間、茶毘の行動は早く、その手から青い炎をフレイドラモンに向けて放つ。

それに対して、フレイドラモンは腕を構えて

「ナツクルファイア!!」

拳から無数の炎を放った。

小さな炎は茶毘の炎にぶつかった瞬間、爆散し、その爆風によって、青い炎を消え去る。

「ぐっ」

一瞬で視界を遮られた茶毘はすぐに次の炎を放つ。

だが、煙が晴れた先にはフレイドラモンはいなかった。

「なにっ!!」

「ファイアロケット!」

「がはあ!!」

次に聞こえてきたのは上空から迫り来る炎を身に纏ったフレイドラモンだった。

爆風の中で視界が遮られた瞬間、フレイドラモンは一瞬で空を跳び、そのままどめを指した。

その事を理解した茶毘は

「くそっ」

「っ!!」

痛む身体に鞭を打つように放った炎をそのまま近くの建物に向けて放たれた。

「お前っ!」

「助けにいかなくて良いのか、ヒーロー」

そう言いながら、一瞬の間を見せたフレイドラモンに対して再び炎を放った。

その身体には燃えながらも、決してダメージを受けた様子は見られないが離れた所を見た茶毘はそのまま離れていった。

「ま「助けてっ!!」っ!ああもう!!」

すぐに追うとしたが、火災した建物の中から聞こえてきた助けを求める声にフレイドラモンはすぐに向かった。

「ぐっ」

傷ついた身体を引きずりながら、茶毘はその場を後にするように逃げていった。

フレイドラモンはその後、火災現場で次々と市民を助け、無事に事件は終わりを迎え

た。

「それにしても、あんたあの姿はなんなの」

「分からないよ。」

というよりも、明ちゃんが作ったマスクで変身できたけど、あれは一体なんだったの
「あの姿については私にも分かりません」

「えっ??」

明の言葉に、幸一も輝も思わず叫んでしまう。

「私が開発したのは、どのような現場でも火に対応するマスクです。」

叔父様のように炎を扱うが、火傷の危険性がある方々に対応するアイテムでしたが、
まさか叔父様の姿が変わるとは!!

という事は似た個性を持つ叔母様もまた姿が変わるかもしれません!!」

「はあ、とにかくどうするの?」

「火災現場では役に立つし、対人戦でも約に立つから、このアイテムは貰うよ。」

一応は申請もしておくし、ありがとう」

「いえ、叔父様に役立ってもらえて私も嬉しいです!!」

それに叔父様がこれからどのような姿になるのか、楽しみでもあります!!」

(あつやっぱりこの子、色々やばいかも)

未だにマッドサイエンティストのような匂いを出している明に対してため息を出しながら、新たな家族にため息を漏らす。

「つて、あれ、家に住む流れこれ!!」

「お世話になります、叔父様!!」

共闘！ガイオウモン

人影が少ないビルの隙間。

そこでヒーローと敵の戦闘が行われていた。

「ぐっ!!」

ヒーローの名前はインゲニウム、ターボヒーローとして活動している彼は街中で不穏な影を見つけ、現場へ急行した。

そこで待ち受けていたのは世間でも多くのヒーロー達を殺してきた敵、ステインだった。

戦闘中、インゲニウムはステインに接近するも、その手に持った武器によって傷がつけられるのと同時に身体が動かなくなっていた。

「死ぬ」

その一言と共に、ステインはその手に持ったナイフをインゲニウムの足に向けて貫こうとした。

「悪いが、殺させる訳にはいかない」

その言葉と共にステインが振りかぶったナイフがインゲニウムへと突き刺さる直前、

彼の前に奇妙な形をした刀がナイフを弾く。

「っ!!」

直前、ステインはその場から去ると同時にその姿を見た。

そこに立っていたのは両手に奇妙な形をした刀を構えている龍を思わせる鎧を身に纏った存在だった。

「あなたは」

「ガイオウモンだ。」

久しいな、天明」

「幸一か!!」

ガイオウモンの正体を知ったインゲニウムは共に本名を呼び合った後、ガイオウモンの手を掴み、そのままインゲニウムは立ち上がる。

「状況は少し把握している」

「相変わらず姿の変化に驚きを隠せないな。」

「だけど、今はその姿が良いかもしれない」

「そう言いながら、インゲニウムは目の前にいるステインを見つめる。」

「ほう、アグモンか」

アグモンという名前を聞いたステインもまた笑みを浮かべる。

「なるほど、貴様の事もよく知っている」

「なに？」

その言葉に疑問に思うガイオウモンだが、その刀は真つ直ぐと見つめる。

「なに、貴様は不合格だが、合格に近いと考えている。

見返りを求めず、誰かの為に戦う、まさにヒーローに相応しい男だ。

だが、貴様はサイドキック一人を失い、市民の群像を演じるようになった!!」
その言葉にガイオウモンは否定する事はできなかつた。

「貴殿が言っている事も理解した。

だが、我には全ての人々を助ける力はない。

オールマイトのような力がない。

ならば、目の前にいる民を守り、危険を犯さないように教えを広げる。

偽物でも、それぐらいはできるだろ」

「愚問だったな。

それと同時に認めよう。

貴様もまた自己犠牲を厭わない英雄だと言う事を」

「幾ら貴様に認められようと、変わらぬ。

何よりも我らはヒーロー、ならば誰かの為に戦うだけの話だ」

「っ!!」

同時にステインは先程までガイオウモンの隣に立っていたはずのインゲニウムがいない事に気づく、

「増援をっ!!」

だが、ステインの耳に聞こえてきたのは遠くへと走る足音ではなく、自身の後ろへと向かう足音だった。

それは地面からではなく、すぐ近くの壁から聞こえており、後ろを一瞬見ると、そこには既に攻撃に移ろうとしているインゲニウムの姿があった。

「ちっ」

ステインはすぐにその場を下へとかがみ、後ろへと下がる。

だが、そこに待ち受けていたガイオウモンは刀を振り下ろし、ステインに向けて攻撃を仕掛ける。

手持ちにあるナイフを使い、その攻撃を受け流すも、インゲニウムは瞬時に近づくと同時にステインの脇腹を抉るように殴る。

「がはっ!!」

脇腹に突き刺さる痛みに一瞬気絶しそうになるステインだが、その勢いを利用しガイオウモンを踏み台にし、飛び上がる。

建物にある窓などを使い、そのまますぐに建物の屋上まで飛び上がると同時に、そこから逃げ出す。

「連携、確かに厄介な奴らだ。

それに見誤ったようだな」

そう言いながら、ステインはそのまま建物を行き来しながら、その場を去っていった。

「ぐっ待っ「落ち着け」アグモンっだが」

「今の貴様が追ってどうする。

もう追っても、追いつかないだろ、それよりも」

そう言いながらガイオウモンはアグモンへと退化すると同時に近くにあったコートから医療器具を取り出す。

「お前、足に怪我をしているだろ。

それなのに無茶をしてどうする。

まずは治療、でないとヒーロー活動もできないだろ」

「だがっ!!」

「お前の速さはこれからも多くの人々を助ける。

だから、走れなくなるような事になるな」

アグモンからの言葉を聞き、落ち着きを取り戻したのか

「すまない」

「とにかく、これから今回の事を報告する。」

まあ世間からどのような声が来るのか分からないけどな」

そう言いながら、アグモンはそのまま携帯で警察や救急車に連絡する。

世間ではその後はステインのヒーロー殺しの初めての失敗という事で大きく話題になった。

「それにしても、まさかこの時期でヒーロー殺しと出会うとは不穏だな」

そう言いながらも、アグモンもまたすぐに来るだろう職場体験の生徒への指名を考えていた。

タイムマン！シャイングレイモン 前篇

職場体験

実際に仕事をしている人と接し、自分自身も体験することで、働くことの意義や目的の理解、進んで働こうとする意欲や態度などを育むことができる。

それは多くの仕事でも見られており、俺が行っているヒーローにもそれが該当している。

そして今日、どうやら雄英の子が家に来て、職場体験をするそうだ。

「えっ、何時の間に」

「あんたが仕事をしている間に、私がしといたわ」

俺は覚えのない学生が来た時には思わず首を傾げたが、それに答えたのは姉さんだつた。

「ねっ姉さん!!」

あんた、なに勝手な事をっ!!」

「五月蠅いわね。」

ぐずぐずしているあんたが悪いでしょうか!」

そう言いながら、俺達は睨み合っている間に

「えっえっと、その大丈夫でしょうか」

「あつごつごめんね！」

そういう事だから、少し戸惑ったけど、改めて僕、アグモンよろしくね」

俺は慌てて、自分のキャラを忘れないように、少し引きつった笑みで実習に来ている子に挨拶した。

「はっはい、なんというか、少し印象と違って」

「うっうん、気にしないで、

喧嘩をしてしまうと、つい大きな声を出してしまつてね」

「よくやるわよ」

そう、俺の反応を見て呆れた声を出している姉さんを無視しながら、俺は改めて来た子を見つめる。

「それで、ごめんね。」

僕は君の事をあんまり知らなくて、名前を教えてくれないかな？」

「あっはい！」

雄英高校1年の芦戸 三奈です！」

そう言い、元気よく声で挨拶してきた。

うん、とつても元気な声を出しているし、性格も明るい。

これは俺の仕事にもついて来れそうだ。

「それで個性はなんなの？」

「はい、全身から酸性の溶解液を分泌する酸です!!」

「うん、少しびつくり」

仕事にびつたりな性格だけど、思いつきり危ない個性じゃないか。

「えっえっと、やっぱり、駄目ですか？」

「うーん、そんな事はないよ。」

まあ僕の仕事で個性は基本は使わないから、とりあえず一緒に行こうか」

「はっはい!!」

そう言い、俺は彼女と共に一週間、仕事を行った。

これまで通り子供達の安全教室にイベント、その多くを体験する中で当初は戸惑いを見せる芦戸だったけど、持ち前の明るさで乗り越える事ができた。

そうして、職場体験最終日の夜。

僕達は仕事終わりの帰り道

「なんだか、凄いね。」

最初は個性で戸惑ったけど、とつても良いよ」

「えっえへへへえ、どうも。」

「なんだか、こうしたのは初めてで。」

「アグモンさんは、なんでこういう仕事を？」

「それはまたどうして？」

「いえ、その。」

「子供達と一緒に過ごすのは楽しいけど、その「ヒーローとは遠いつて」はい！」

「アグモンさん、いつもランキングは下だけど、私、昔からファンだったので」

「そうか」

「ファンという事を知って、多少嬉しく思いながら」

「だけど、やっぱりランキングが下で、その他のヒーローと比べて馬鹿にされている声も聴くので」

「そう、少し落ち込んでいる彼女に対して」

「確かにランキングは大事だし、人の命を助けるのも大切だよ。」

「でもね、僕達がこうやって子供達と触れ合いながら、危険について教えるのも、大切な事なんだよ」

「それは、はい、分かっていますけど」

「それでも、未だに迷っているようだ。」

さて、どうしたもんか。

そう考えていると

「っ!!」

聞こえてくる悲鳴、同時に見つめるとそこには黒い肌をした奴が立っていた。

「アグモン」

「っ!!」

聞こえてきた声に振り向くと同時に、俺はそのまま芦戸を吹きとばし

「ピンキー、応援を呼んで来い」

「っ、あれっ!!」

その声と共に奴は正体を現し、そこには鼻が長い奴が現れ、顔は脳を剥き出しになつてこちらを見つめている。

「あれっ、USJを襲った奴に似ているっ!!」

「USJって、まさか」

改めて見ると、相澤から教えてもらった謎のヴィランと同じ特徴を持つ。

「油断はできない相手という事か」

聞けば、あのオールマイトでも苦戦した相手。

ならば

「手加減は必要ないな、アグモン、ワープ進化」

その言葉共に奴はこちらに向けて、拳を振り下ろした。

それに対して、俺はその拳を受け止めながら、反対に殴り返す。

「シャイングレイモン」

その言葉と共に構えながら、目の前にいる奴を睨む。

「シャイングレイモンって、見た事がない」

「まあね。」

ここまで来ると加減を間違えれば、町に大きな被害が出るからな。

だけど、そうも言ってられないからな」

そう言いながら、目の前にいる謎のヴィランはこれまで戦ってきたヴィランの中でもかなりやばい奴だと分かる。

少しでも油断すれば、負けてしまう。

「さあ、ここからはタイマンだけ、ヴィラン!!」

「ガアアアア!!」

その言葉と共にヴィランも雄叫びを上げながら、拳を振り上げて、互いに拳が激突する。

タイマン！シャイングレイモン 後編

「はああああああ!!」

その雄叫びと共に、その戦いは起こっていた。

その両者共、怪獣を思わせる見た目をしており、純白な鎧で身を纏っているドラゴンであるシャイングレイモン。

そのシャイングレイモンと戦いをくり広げられているのはUSJを襲撃した謎の怪人。

その両者は武器を一切持たず、素手での殴り合いを行っていた。

体格に大きな差がない二人だったが、怪人の力は僅かに上なのか、シャイングレイモンの身体各部には僅かだが殴られ、凹んでいた。

それでもシャイングレイモンは、長年のプロとしての勘と経験を頼りに、それらの攻撃を僅かなダメージに抑えながら、反撃を行うように真つ直ぐと怪人を殴る。

その殴られた箇所は真つ直ぐと急所を狙っており、普通の怪人ならば、一発受けただけでもすぐに倒れる程の威力を持っていた。

だが、怪人はそのダメージを受けた直前に、瞬く間にダメージを回復し、反撃する。

「アグモンっ」

「下がってろ、ピンキー」

そう言いながら、シャイングレイモンはそのまま怪人を睨む。

それを見ながら、ピンキーの動きは未だに鈍い。

それを見たシャイングレイモンは

「さっきの話の続きだったな。

ランキングを指さないのは確かに僕の考えだ。

だけど、決してランキング上位を目指すのは悪い事じゃない」

「えっ、それは」

そうシャイングレイモンは息を整える。

「ランキング上位を目指すというのは、ヒーローとして正しい姿を探す為でもある。

助けを求める声を、声にならない悲鳴を見逃さない、決して誰も見捨てない。

そんな、トップヒーローは、普通のヒーローでは決して越えられない壁を乗り越える。

その象徴が彼らなんだ」

そう言い、シャイングレイモンは拳を強く握り締める。

「俺は俺自身が正しいと思えるヒーロー像がある。

だけど、誰もがそれが見える訳じゃない。

だから、ランキングはそれを知る為の、ヒーロー像を見つける為の物なんだ」
そのシャイングレイモンの言葉と共に、ピンキーこと芦戸は友人である切島が目指しているのが紅頼雄斗である事を。

そして、切島のように、ランキングにいるヒーロー、そのランキング上位を目指しているヒーローを見て、ヒーローを目指しているのを。

「だからこそ、ヒーローは負けないよ!!」

それを合図に、怪人は巨大化した腕をシャイングレイモンに向けて放った。

それに対して、シャイングレイモンは巨大な翼を広げて、その光のエネルギーを拳に集めた。

「行くぜ!!グロリアスバースト!!」

その言葉と共に本来ならば光線として放つ技を殴り、放った。

かつてUSJでオールマイトのデトロイトスマッシュと互角であった拳だったが

「ガアアア!!」

グロリアスバーストの一撃を受けた怪人は瞬く間に吹き飛ばされ、近くのビルにめり込んだ。

「ふう」

それと共に、シャイングレイモンはそのままアグモンへと姿を戻した。

「なんとかなったか」

そう言いながら、アグモンはそのまま汗を拭う。

「アグモンさん！」

「ほら、ピンキー。」

まだ、油断はできないよ。

現場の救助とか、やる事は一杯なんだから」

「っはい!!」

その言葉と共にアグモンはピンキーと共に、再び現場を向かう。
未だに混乱が収まらない町の人々を救う為に。